

バルトン没後一〇〇年記念

'99バルトン忌

主催 日本下水文化研究会

日時…平成一二年八月五日(木)

墓 参…青山霊園

お墓参り・献花

午後一時～二時

記念シンポジウム…青山A Aビル コンフォート

開会・来賓挨拶

午後二時～

基調講演

午後二時三十分～

特別報告

午後三時二十分～

パネルディスカッション

午後四時三十分～

懇親会

午後六時～七時三十分

今年も昼下がりの盛んな蝉声のなか、バルトン先生の墓参が行われました。今年には没後百年ということ、鳥海幸子さんにご出席をお願いして、参加皆様にご挨拶と感謝のおこたばを頂きました。また、浅草十二階の建設に関わったバルトン先生の業績について報道機関の取材が相次ぎ、稲場教授がこれに対応されました。この墓参での様子は、後日、テレビ放映されています。

この他、墓前では、恒例のアメージンググレイスの斉唱と、参加者みなさんの集合写真の撮影が行なわれました。



アメージンググレイスの斉唱



墓参集合写真

引き続き、場所をコンフォート会議室に移し、約一〇〇名の参加者のもとで、記念シンポジウムが酒井代表の開会挨拶にはじまり開催されました。来賓として、建設省河川局の渡辺和足課長、厚生省水道環境部の岡澤和好課長、同都市局の栗原秀人下水道事業調整官、東京都下水道局の鈴木章局長をお招きし、バルトンの業績、本会の活動について賞賛のお言葉とご挨拶を頂きました。また、The British Councilからもメッセージをいただきました代読されました。

基調講演は、「バルトンと東京水道」と題して、東京都水道局建設部の増子敦課長より、東京水道の発祥時にバルトンが関わった詳細な様子についてご講演を頂きました。また、日本スコットランド協会の稲永理事より、スコットランドで現地調査されたバルトン家の系譜とその人々などについて、さらに、日本下水道協会照井氏（本会運営委員）より、バルトンの足跡を年表として取りまとめた詳細な報告がありました。記念シンポジウムの総まとめとし、京都大学の市川教授、大阪経済大学の稲場教授、長崎大学の早瀬教授、水資源開発公団の坂本理事、日水コンの玉井副社長をパネリスト、酒井代表を座長として、パネルディスカッションが執り行われ、それぞれの視点から水事業全般にわたる今日的課題について

議論が交わされました。

これらの内容は、それぞれの講演録として掲載されていますので、是非ともご覧下さい。

(佐野廣二)



会場パネルディスカッション写真

バルトン忌来賓ご挨拶

バルトン先生の曾孫・鳥海幸子さん

先程は、お暑い中、曾祖父バルトンのお墓参りをしていただき、本当にありがとう存じました。異常な暑さのために体調を崩される方が出ないかと心配しておりました。あのようにたくさんの方々がお参り下さって、私自身本当に良かったと心から喜んでおります。

曾祖父バルトンは、母方につながる人で、私の母がバルトンについていろいろな話を聞いておりました。私は、母から時たまそういう話をちらりちらりと聞く程度でした。バルトンについてお調べの方が我が家をお訪ね下さっても、母が一切応対しておりました。私は、そんな折、お茶を出したりする程度で、どちらかと言えば傍観者だったことを今さらながら大変後悔しております。

母が書きました『霧の中から』という本は、母が生前、自分の母親（多満子）から聞いていたバルトンの話を少しづつ書き留めておいたものです。このようなものが我が家にあるということを私自身全く気がつきませんでした。何か日記のようなものを書いているなどという程度に思っていました。母が亡くなつて一年経つて、納骨も終わる遺品を整理しておりましたところ、封筒が出て来ました。その表に「稲場先生に」と書かれた文字が目飛び込んで来ました。

「何だろう」と思つて中を見ると、バルトンについていろいろと書き留めたノートと原稿が入っていました。この記録には曾祖母・荒川松子のごことは、ほとんど書かれていません。「どうしてなの」と尋ねたくても、既に母はおりません。私にとりましては分からないことばかりです。母に

記念シンポジウム

何を語りかけるのか～



とつても「霧の中」なのですが、私にとつてはまさに「濃霧の中」をとぼとぼ歩くような状態です。その後、研究者の方々などからいろいろとお教えいただき、私の濃霧も徐々に晴れてまいりました。バルトンの末裔の者として嬉しく思っています。

いることは確かですが、水というものに対する考
え方を私を含めてより深く学ぶべきであったと
今つくづく感じる次第です。

本日、このような場所を私をお招き下さいまし
て、またいろいろとご準備下さいました方々に心

京都市などでは、ほんの二〇、
三〇年前までは鴨川に綺麗な友禪
をいっぱい流しまして、そして紫
や青などの染料が川下に流れて行
きました。川下の流れは、淀川に
合流し、大阪市に流れ込んでいま
した。そこで柴島浄水場で大変高
度なる過をして水道にしていたと
聞いております。今は川で友禪を
流すこともなくなりました。昔は
天然染料を使っていたので、今ほ
ど有害なものではなかったと思っ
ます。しかし、化学染料は、絶対
に川に流してはいけないと思いま
す。いろいろな面で徐々に進んで

から感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。ございました。



建設省河川計画課 渡辺和足課長

渡辺課長には、ご多忙のなか貴重なご挨拶をいただきましたが、当方の不手際で、録音されておりませんでした。

渡辺課長のお言葉のなかで、二十世紀は石油の時代であったが、二十一世紀は水の時代になり、水がもつとも貴重な資源にといって指摘がございました。水を守ることを会の趣意としております。本会としては、生命の水を汚さず、水との成熟したかかわりに向け、この言葉を深く刻んでおきたいと思えます。この日、後に行われました、パネルディスカッションにおきましても、稲場先生も言及されております。渡辺課長に對しましては、ここに陳謝いたしますとともに、会員の方々に對

しましても、以後このようなことのないよう細心の注意を払ってまいりたいと存じます。



厚生省水道整備課 岡沢和好課長

(現水道環境部長)

バルトン先生没後百周年記念シンポジウムの開催にあたりまして、一言お祝いのご挨拶を申し上げます。動脈である上水道と静脈としての下水道、河川なども循環器系統の一つに例えられると思えますが、これらが一体となることで、人間の健康というものが形成されるのではないのでしょうか。私は、国土または世界の環境についても同じことが言えると思えます。

水を汚染から守ることが日本と世界の環境を守ることにつながると考えます。現在、水を巡るいろいろな難しい議論、例えば環境ホルモン問題等がありますが、このようなシンポジウムを開く

ことで、関心のある方々が一体となって議論をし、二十一世紀の水のあり方について考えを深めていただくことは、たいへん大事なことだと思いません。

バルトンという名前は、日本の上下水道を語る時に忘れることができません。バルトン先生は、明治二十年から十二年間日本に滞在し、最後の3年間は台湾で指導に当たられました。この間、首都東京の水道計画に携わり、さらに内務省の顧問技師として、全国各地の計画を指導されました。また帝国大学の衛生工学の教授として学生を教育されました。明治二十二年、「水道の敷設を計画する都市は、内務省に意見を求めることができる」という通達が出ていますが、この通達がバルトン先生が日本各地の水道と関係を持つ契機になったのではないかと思います。

バルトン先生の下で助教教授だった中島鋭治先生は、日本の上下水道界の創始者とも言うべき立派な人で、バルトン先生の後任として技術を引き継ぎ、さらに発展させました。バルトンと中島鋭

治、両先生が育てた学生達がその後、明治後期から昭和初期の上下水道界を担い、その発展に大きく貢献しました。もう一人、パーマーという人物がいますが、日本に滞在した実質の期間では三年程度です。バルトン先生の場合、かなりまとまった期間滞在し、日本人に技術をしっかりと伝達したことが非常に重要です。現在の日本の国際協力の在り方に貴重な示唆を与えるからです。資金提供は大切ですが、当該国に技術を根付かせることはある意味でもっと大事だと思います。私達は、日本の国際協力の一環として、開発途上国の水道事業の推進に貢献したいと願っています。バルトン先生が日本のためにやって下さったことを、これからは日本が途上国のために行わねばならないのではないのでしょうか。

先週もアメリカのEPAとの間で、上下水道を合わせた国際会議が開かれました。日本では現在、上水道行政は厚生省、下水道行政は建設省と二つの省に別れています。これからは一層連携を深めて参りたいと思います。以上をもってお祝いの

言葉とさせていただきます。



建設省下水道企画課 栗原秀人事業調整官

ただいまご紹介頂きました、建設省下水道企画課事業調整官の栗原でございます。

本日はバルトン没後百年記念シンポジウムにお招きいただきまして、本当にありがとうございます。開催にあたりまして、ご挨拶申し上げます。

いろんな方からお話がありましたように、バルトン先生は明治二十年に帝国大学の講師として日本に招聘され、いろんな弟子といますか、上下水道学で多くの人材を育成され、また、同時に東京市をはじめ、仙台、名古屋等各地でも活躍されました。

先生がお亡くなりになった時期は、年度でいいますと、明治二十三年度でございますが、この翌年に旧下水道法が制定されまして、我が国の下水

道が名実ともに第一歩を踏み出したということになるわけです。先生が果たされた功績あるいは導いてこられた全国の下水道関係者の実績が法律の制定に大きく影響した、これは予想にかたくないことだというふうに思っております。

下水道法を振りかってみますと、明治の下水道法は土地の清潔を保持するため、汚水、雨水を疎通する目的で敷設されるものという、いわば公衆衛生といったところが主眼におかれていたものでございます。

その後、昭和三十三年に現在の下水道法が制定されますが、そこで規定されている目的も都市の健全な発展、公衆衛生の向上にあったわけですが、れども、その後大きく下水道が役割・目的を変えますのは、ご承知のように、高度成長の過程の中で我が国が引き起こしてしまった水質汚濁を初めとする多くの公害に対応していくために、昭和四十五年に開かれた公害国会です。この中で下水道法が改正されまして、目的に公共水域の水質保

全に資するという新たな目的が追加されました。このことよって全国に下水道が展開されていくというふうになつていくわけです。

こう振り返つてみますとバルトン先生に教えられた日本の下水道もその時々々の社会の情勢あるいはその時々々の水の状況の中で目的を変え、あるいは姿、形、仕組みそんなものを変えながら整備が進められてきたと言つていいかと思ひます。しかし百年たつてどうかといひますと、まだ、普及率で申し上げまして六十五%でまだまだ道半ばではございます。

道半ばではありますけれども、まもなく二十一世紀、バルトン先生没後百年、旧下水道法制定からもちょうど百年になり、二十一世紀にはいるにあたつて、先程、両課長さんのお話にありましたけれども、水を巡る環境というものはもつと厳しく、大きく変化してきています。

水に対する地域、人々のニーズといったものも多種多様になつてきています中、下水道もといひ

ますより、昨今の水のめざす姿とはなんだろうか、とういうところをみんなが共通認識を持つて、その上でこれからの下水道は何を果たしていくのか、ということを私たちが真剣に考えなければいけない、そんな時期になつていくというふうになつております。

先程来からございましたように、下水道だけで水を考へてはいけない時代、いろんな関係局と協議も進めております。そんな中で下水道協会と共同しまして下水道政策研究会というものを設置いたしました、これからの下水道は何を役割として進めていくべきなのか、そんなことを各方面の先生に議論を頂いているところでございます。

こういつた議論をこれからはより多くの方々、異業種の方はもちろんでございますか、一般の市民の方々にも多くの意見を頂きながら進めていく必要があるんだろうと思つておりまして、また、みなさんに積極的なご意見をちようだいする機会を是非もちたいと思つております。

そんな状況の中、本日のシンポジウムが百年の下水道を振り返り、そして、二十一世紀に向けた今後の下水道のありようを議論する場となりまして、下水道の発展につながれば本当にうれしいことだと思っております。バルトン忌開催に毎年ご尽力頂いております、日本下水文化研究会の活動に敬意を表しますとともに、本日のシンポジウムの成功と研究会のますますのご発展を祈りしませて挨拶とさせていただきます。



東京都下水道局 鈴木彰局長

東京都下水道局長の鈴木でございます。

バルトン先生の百年忌にあたりまして、挨拶の機会をあたえてくださり、また、下水道の歴史的文化的側面について地道な研究啓蒙活動を続けておられる日本下水文化研究会のみなさんに感謝と敬意を表するものであります。

バルトン先生と東京の下水道との出会いは明治二十一年十月、時の政府の上下水道設計調査委員にバルトン先生が任命されたときに始まりま

す。先生は当時下水道が一番進歩していたイギリスから政府の招へいに応じて来日していらっしゃった、新進気鋭の衛生工学者であり、政府から委嘱を受けてからわずか1年たらずの間に東京で最初の本格的な下水道計画をまとめるなど、非常に精力的な活動をなさっておられます。

その計画内容につきましても、東京の気候や自然条件はもとより当時の経済状況や技術レベルを加味した大変現実的なものでございました。また、イギリスで実用段階に入ったばかりの新しい処理方式を採用するなど極めて画期的なものでもございました、いずれにしましてもバルトン先生のこの計画を元にその後の紆余曲折はございましたが、平成6年度末、区部下水道の普及率一〇〇%概成が達成されたわけでございます、東

京都市民を代表して改めてバルトン先生の功績に
深甚な感謝を申し上げるものでございます。

この百年間の技術的な蓄積を持ちまして、現在、
東京都からは中国、タイ、インドネシアなどアジ
ア諸国を含めエジプト、アルバニアなど世界各地
に職員を派遣して技術的支援を行ううまになっ
ております。

残念ながらバルトン先生のように現地の女性
と結婚してその地に同化してしまった職員はま
だおりませんが、今後、環境という面で世界がま
ずまず一体化しつつありますので、地球環境を守
る中核としての下水道技術をさらに発展させて、
それを先生がなされたように、惜しみなく世界に
発信していくことをお誓い申し上げます、バル
トン先生の百年忌にあたってのご挨拶とさせて
いただきます。

Message for Burton Memorial Symposium

It is very impressive that so many professional engineers in Japan continue to celebrate the memory of Burton, who played such an important role in the modernization of Tokyo and other cities. Burton was, of course, a man of many talents and, like many engineers, he was a creative and artistic person as well as a very practical one. There could be no better symbol of the important relationship between our two countries.

Mike Barrett, OBE
Former Director, The British Council, Japan